

想起の心理学と現象学

—想起の不変性と可変性をめぐって—

中澤栄輔
東京大学大学院総合文化研究科
(科学史・科学哲学)

1 序

幼い頃、ぼつんと一人でテレビを観ていた。私はいまこの情景を思い出してみる。なぜか私のこの記憶にはテレビを観ている私の背中が含まれている。なぜ、私はテレビを観ている自分の背中を記憶しているのだろうか。実際は見ることのできないはずの光景をどうして記憶しているのだろうか。知覚された対象の内容がいつのまにか変化したのであろうか。

本論では想起の内容に着目し、長期記憶の不変性と可変性を扱う。認知心理学では伝統的に、長期記憶は不変的なものであると考えられてきた。しかし、次第に長期記憶の可変性を扱う研究が現れる。長期記憶の可変性を扱う研究は長期記憶の内容に着目する。

こうした認知心理学における長期記憶の研究をみることで、Husserlの想起概念を再検討することが本論の目的である。Husserlの想起論は形式に焦点が当てられていて、内容にかんする考察に乏しい。そのため、Husserlの想起論は長期記憶の不変性を支持しているかのように見える。しかし、それはあくまでもHusserlの時間論が形式的側面に焦点をあてているからである。Husserlの考察には長期記憶の可変性を示すと考えられる箇所も見出すことができる。本論の最後にHusserlによる長期記憶の可変性を試論として提示する。

2 準備的考察——Husserlの想起概念——

本節では、まずHusserlの時間論を概観する。そのあとでHusserlの時間論のなかで想起が占める役割を示す。最後に、Husserlの想起概念には内容についての分析が

欠けていることを指摘する。

Husserlは過去把持(第一次記憶)と再想起(第二次記憶)¹を区別する(Husserl [1966] Hua. Bd. 10)。たとえば、いま、私は散っているサクラを知覚しているとする。散っているサクラの知覚は時間的に幅をもっている。幅をもった知覚は瞬間的ないまと過去把持と未来予持を時間的な内部構造としてもっている。散っているサクラの知覚は次第に過去へと沈殿していく。後続の知覚が散っているサクラの知覚に代わって現前化する。過去へと沈殿していく知覚は後続の知覚によって覆い隠されるように次第に忘れられていく。再想起は沈殿した知覚の再現前化である。再び私は散っているサクラを目の当たりにする。このとき目の当たりにしているのはかつて知覚した、あの散っているサクラである。再想起は以前の知覚が再現されることである。以上がHusserlのいう再想起の基本的枠組みである²。

再想起の基本的枠組みを確認したところで、つぎに再想起がHusserlの時間論のなかで占めている位置を確認したい。再想起は「第二次」記憶であるといって、副次的なものと考えてはならない。第一次記憶である過去把持(そして未来予持)は「いま」の知覚にかかわっている。過去把持は「いま」と「たったいま」がずれているという事態を理解可能にする。しかし、過去把持だけで「過去」という時間意識を構成することはできない。「サクラがああとき散っていた」という過去を「いま」と「たったいま」のずれだけから説明するには飛躍がありすぎる。「過去」が構成されるためには、再想起を考慮に入れる必要がある。再想起はHusserlの時間意識の分析において不可欠な要素である。

ところで、以前に知覚された対象が再想起される時、その対象は知覚されたそのままのかたちで再現されるのであろうか。それとも、何かしらの変化をうけて再現されるのであろうか。これは想起の内容にかんする問いである。

以上の問いにかんして、「準現前化的変様」がキータームになるだろう。再想起は知覚された対象の準現前化である³。準現前化された対象は準現前化的変様を伴ってい

1 以下、再想起と想起を同義語として扱う。

2 私はかつて知覚した、あの散っているサクラを何度でも任意に繰り返して再想起することができる。任意に繰り返すことのできる再想起は能動的な再想起である。それに対して、何かに触発されていきなりああときの散っているサクラが再想起されることもありうる。触発による再想起は受動的な再想起である。しかし、本論では能動的な再想起と受動的な再想起を問題とはしない。

3 知覚されている対象はつねに私が目の当たりにしている対象である。対象が目の当たりに

る。かつて知覚した散っているサクラが再想起される時、その散っているサクラはかつて知覚したときよりもぼんやりと表象される。もっとも、つねにまざまざと表象されるような再想起もありうる。しかし、たいていの再想起はぼんやりしている。しかもそのぼんやり度は時を経るにしたがって増大するのが普通である。準現前化的変様とは知覚された対象と再想起された対象の現れ方の差異を示している。対象の与えられ方が変わるとき、対象の内容も一緒に変わるかどうかは不明である。少なくとも、Husserl が準現前化的変様というとき、積極的には想起の内容の変化を指してはいないように思われる。このことは Husserl が「対象の与えられ方」という「形式」の変化に着目し、それを強調しているためであると考えることができる。

基本的に、想起の内容にかんする考察は Husserl に欠けている。その理由は、Husserl が時間性の形式に焦点をあてた考察を展開したためであろう。実際、想起の「内容」にかかわる Husserl の記述を見つけることは、「形式」にかかわる記述を見つけることよりも難しい。

3 作業仮説—— Husserl の想起と長期記憶の対応——

心理学の記憶研究で重視されているモデルに二重貯蔵モデル (Atkinson & Shiffrin [1968]) がある⁴。二重貯蔵モデルによると記憶は短期記憶と長期記憶に分けることができる⁵。短期記憶と長期記憶が保存されている倉庫をそれぞれ短期貯蔵庫と長期貯蔵庫という。

体験されることを、対象が「現在化する」という。知覚は対象を現在化する作用である。再想起によって以前の知覚が再現される時、確かに私は対象を目の当たりに体験している。しかし、再想起によって再現された対象は知覚によって現在化された対象とは現れ方が異なっている。再想起された対象はあたかも目の前に横たわっているかのように思われる。しかし再想起された対象はかつて知覚された、もはや過ぎ去った、いまはない対象である。実際には目の前にないものをあたかも目の前にあるかのように再現することが再想起である。このとき、再想起されている対象は「準現前化」されているという。再想起は対象を準現前化する作用である。

4 二重貯蔵モデルのオルタナティブとして処理水準モデルが考えられる (Craik & Lockhart [1972])。処理水準モデルは二重貯蔵モデルが想定する二つの貯蔵庫を処理水準の違いによって統一的に説明する。(Cf. 高野 ed. [1995] p. 17. et al.)

5 長期記憶は宣言的記憶と手続記憶に分けることができる (Cohen [1984]; Squire [1987])。さらに宣言的記憶はエピソード記憶と意味記憶に分けることができる (Tulving [1972; 1983]; Collins & Quillian [1969])。

短期記憶は情報を一時的に保存する。それによって認知活動は滞りなく行われる。たとえば、道路をわたるとき、自動車にぶつからないように左右をよく確認しなければならない。私はまず右側を確認し、それから左側を確認する。左側を確認するとき、もしもちょっと前に確認したはずの右側の情報が失われてしまっていたら、私はもういちど右側を確認しなければならない（以下、無限に続く）。私が確信をもって道路をわたることができるのは、左側を確認するとき、ちょっと前に確認した右側の情報が短期記憶として保持されているからである。これを現象学的に「たったいま確認した右側の情報を過去保持しているから、私は確信をもって道路を渡ることができる」といい直すことはできないだろうか。

短期記憶には限界がある。たとえば、ランダムに数字を並べられ、それを復唱する（数字記憶範囲）。われわれは 12 桁くらいまでならば復唱できるが、それ以上は無理である。しかし、円周率を小数点以下 20 桁くらいまで覚えている人は珍しくない。しかも、そういう人はいつでもその 20 桁を再生することができる。二重貯蔵モデルによると、その人は円周率を小数点以下 20 桁くらいまで長期記憶として保存しているといえる。長期貯蔵庫に取められた情報は短期貯蔵庫に取められた情報と比較にならないほど長く保存される。私はいつでも自分の長期貯蔵庫に取められている自分の幼い頃の記憶をとりだし、再生することができる。これを現象学的に「以前に知覚した知覚を再想起する」といい直すことはできないだろうか。

本論では認知心理学における短期記憶と長期記憶の区分は Husserl の第一次記憶と第二次記憶の区分に対応していると仮定する⁶。その仮定のもとで認知心理学における長期記憶と Husserl における第二次記憶をそれぞれ考察する。

6 この仮定は自然化された現象学がとる方法である。自然化された現象学とは何か。自然化された現象学は方法論として捉えられる。

自然化された現象学は、哲学的問題にたいして現象学的方法と経験科学的方法（主に認知科学的方法）という二つのアプローチを認める。自然化された現象学の仮定によると、現象学的方法と経験科学的方法は相互依存し、哲学的問題の解決に寄与する。（Varela [1996]; [1999a]; Roy et al. [1999]）。自然化された現象学は方法論的自然主義の一形態である。

自然主義は存在論的自然主義と方法論的（認識論的）自然主義に分けることができる。存在論的自然主義の多くは物理還元主義を採る。存在論的自然主義は「存在するものは物理的事物のみである」と仮定する。存在論的自然主義を採るならば、方法論的自然主義を採ることになる。方法論的自然主義は「哲学的問題に経験科学の知見を取り入れてもよい」と考える。多くの場合、方法論的自然

4 心理学のなかの想起概念

本論は認知心理学における長期記憶，とくにエピソード記憶に着目する⁷。エピソード記憶の研究は記憶の内容に焦点をあてている。エピソード記憶の内容を不変なものとして捉えるか，それとも可変なものとして捉えるかで，認知心理学における記憶観の差異をみてとることができる。それゆえ，以下の論述は長期記憶の可変性と不変性をめぐる議論となる。この節では，Husserlが問題としていないように思われる長期記憶の内容について，認知心理学がどのように扱っているのかをみてみたい。

そこで，各論に入る前にエピソード記憶の定義を確認したい。エピソード記憶とは個人的経験に関する記憶であり，特定の時間と特定の場所が関係し，経験者の印象が伴う。(Tulving [1972]; [1983])

4.1 認知心理学における長期記憶の不変性

記憶の実験心理学は Ebbinghaus に始まる。のちの行動主義的心理学は Ebbinghaus の研究方法を受け継いでいる。また Ebbinghaus の行った実験の結果である記憶の不変性も，のちの研究の基調をなしている。

Ebbinghaus は無意味綴りを用いて長期記憶におけるの忘却量を測定している。

主義を採れば存在論的自然主義も採る。しかし，方法論的自然主義を採ったからといって必ずしも存在論的自然主義を採る必要はない。

存在論的自然主義を採らずに方法論的自然主義を採るという立場において，自然化された現象学は成立する。存在論的自然主義を採ってしまうと自然化された現象学は成り立たない。前述のように自然化された現象学は，哲学的問題にたいして現象学方法と経験科学的方法の二つのアプローチを許す。もし存在論的自然主義を採ってしまうと，自然化された現象学は現象学的方法を採ることが難しくなる。なぜならば，現象学的方法は反自然主義的な存在論と密接に関連しているからである。存在論的自然主義と現象学的方法は甚だしく折り合いが悪い。よって，自然化された現象学は方法論的自然主義を採り，存在論的自然主義を採らない。このことは自然化された現象学が物理還元主義ではないことを示している。

以上のように，自然化された現象学は方法論的自然主義を採り，存在論的自然主義を採らない。それゆえ，自然化された現象学は物理学還元主義の一つではない。自然化された現象学は，特定の哲学的問題にたいして現象学的方法と経験科学的方法の二つのアプローチを認める方法論である。

7 意味記憶はエピソード記憶との関連でとりあげる。意味記憶を定義すると，意味記憶とは特定の時間と特定の場所に関係することはなく，一般的な情報に関する記憶である (Tulving [1972]; [1983])。

その結果、忘却量は時間経過に対して負の加速度をもつ曲線で表すことができる。この曲線を忘却曲線という。Ebbinghaus の忘却曲線は 30 日間で 80% の忘却率を示している (Ebbinghaus [1885])。逆からいえば、いったん記憶された無意味綴りの 20% は長期貯蔵庫 (long-term store: LTS) に保存されていることになる。

Bahrick の実験によると、長期記憶は Ebbinghaus の忘却曲線が示しているよりも高い保存率で、しかもより長期にわたって LTS に保存されている⁸。Bahrick が考える LTS は情報を永久的に保存するハードディスクのようなものである。Bahrick は LTS に保存されている情報の不変性を主張している (Bahrick et al. [1975]; Bahrick [1984a]; [1984b])。

長期記憶が永久的に LTS に貯蔵されているという考えは、Penfield の神経生理学的研究によって支持されている。Penfield によると、被験者の側頭葉に電気刺激を与えることで、被験者はふつう意識にのぼることがない過去の情景を鮮明に意識する (Penfield & Perot [1963])。Penfield もまた LTS に貯蔵された情報は不変であると考え (Penfield & Roberts [1959])。とりわけ、Penfield の実験と考察はエピソード記憶の不変性を示している。

以上のように Ebbinghaus の方法は実験を重んじ、記憶の不変性を強調する。記憶は不変的 - 永続的に LTS に貯蔵されているわけだから、少なくとも積極的には記憶の減衰や相互干渉による変容は認められない。この方向性にしがうと、忘却とは記憶情報を検索する際の失敗であると考えられる。

4.2 古典計算主義とコネクショニズムの対立と長期記憶

前節では心理学における長期記憶の不変性を概観した。ついで、心理学における長期記憶の可変性を論じる。しかし、そのまえに 4.2.1 と 4.2.2 で AI 研究における古典計算主義とコネクショニズムの対立を長期記憶の不変性と可変性に絡めて論じてみたい。AI 研究を参考にすることは、心理学における記憶観の差異をよりはっきりと捉えるための補強材料となる。

8 Bahrick の実験は Ebbinghaus の実験の影響下にあるとはいえ、日常的素材を用いていることで、行動主義的心理学とは一線を画している。

4. 2. 1 古典計算主義における記憶

心の古典計算主義的モデルは長期記憶の不変性と相性がよい。

心の古典計算主義的モデルはコンピューターが行う演繹的推論をもとにして考えられたモデルである。一般的に、推論は文によって構成されている。そして文は構文論的構造をもっている。文が構文論的構造をもっていることは、それぞれの文肢が文脈独立的であることを示している。心の古典計算主義的モデルは、心的表象が構文論的構造を持っていると仮定する。よって心的表象のそれぞれの部分は文脈独立的である。(信原 [2000])

心の古典計算主義的モデルは記憶の永続性を前提にしている。たとえば「すべてのイヌには尻尾がある。ソウイチロウはイヌである。それゆえ、ソウイチロウには尻尾がある」と推論するとき、「すべてのイヌには尻尾がある。ソウイチロウはイヌである。それゆえ」と言った直後、「ソウイチロウ」という言葉を忘れてしまったら推論は成り立たない。確かに日常的な推論においては考えられなくもない状況ではある。しかし、推論を基礎にした心のモデルを作るときには、まずこうした状況は起こりえないと前提しなければならない。したがって、心の古典計算主義的モデルは記憶の永続性を前提としている。短期記憶であろうと、長期記憶であろうと、心の古典計算主義的モデルは永続的な記憶という前提のもとで成り立つモデルである。

加えて、心の古典計算主義的モデルを採ることはエピソード記憶の不変性を主張することでもある。エピソード記憶は定義により、特定の時間位置と特定の空間位置をもっている。このことはエピソード記憶の諸部分が文脈依存的であること(文脈独立的ではないこと)を示している。それゆえ、エピソード記憶は構文論的構造をもたない。構文論的構造をもっていないのならば、エピソード記憶が部分的に変化することはありえない。たとえば「ソウイチロウは白いイヌである」という文の表象内容がエピソード記憶であるとして、このエピソード記憶の「白い」という部分を「茶色い」に置き換えることはできない。すると、心の古典計算主義的モデルにエピソード記憶を組み入れようとするならば⁹、

9 実際、古典計算主義はエピソード記憶を扱っている。その場合、エピソード記憶はスクリプト表現で示されることになる。時系列に沿った行動の一覧表をスクリプトといい、スクリプトを記号で表したものがスクリプト表現である (Cf. Schank & Abelson [1977])。しかしながらスクリプト表現でエピソード記憶を表すことはエピソード記憶の定義を変えることになる。なぜならば、スクリプト表現は構文論的構造をもつからである。エピソード記憶の定義から、エピソード記憶は文脈依存的であり、構文論的構造をもたないことが導かれる。スクリプト表現はエピソード記憶の定

エピソード記憶は部分に分けることのできない一つのまとまりとして推論に寄与する、と考へなければならぬ。この場合、エピソード記憶の中身は不変のまま保持されている。

長期記憶の不変性、永続性と古典計算主義の相性がよい理由は以上である。

4.2.2 コネクショニズムにおける記憶

前節では古典計算主義と長期記憶の関係を扱った。ついでコネクショニズムと長期記憶の関係を論じたい。エピソード記憶に着目し、古典計算主義とコネクショニズムの対立点を明らかにすることが本節の目的である。

すでに述べたように、心の古典計算主義的モデルは記憶の永続性を前提としている。しかしコネクショニストモデル¹⁰は記憶の永続性を前提としない。なぜならば、コネクショニストモデルはユニット間の結合荷重を変えることによって情報を分散処理するからである。記憶が永続的であるということは、ある結合荷重の配列が一定のまま保たれるということである。コネクショニストモデルは結合荷重が変わることを前提としているので、記憶の永続性をともに前提とすることはできない。もし結合荷重の可変性と記憶の永続性をともに前提したら、前提どうしが矛盾するからである。

加えて、コネクショニストモデルの帰結としてエピソード記憶の不変性が導かれることはない。心の古典計算主義的モデルはエピソード記憶の不変性を導くので、この点でも

義からのこの帰結に反している。それゆえ、もしスクリプト表現でエピソード記憶を表そうとすれば、エピソード記憶の定義を変えなければならない。

10 記憶を扱うことができるコネクショニストモデルはフィードバック型モデルである。コネクショニストモデルは一般に入力層、隠れ層、出力層という三層で構成されている (Cf. Rumelhart et al. ed. [1986]). フィードバック型モデルの特徴は出力層から隠れ層に情報を戻す回帰的回路を持っていることである。回帰的回路を持っていることで、フィードバック型モデルは運動や変化といった時間的表象を扱うことができる。いったん出力された値を隠れ層に戻すことで、進行中の処理は直前の処理と総合される。フィードバック型モデルが時間的表象を扱うことができるのは、回帰的回路によって可能となる一種の短期記憶をもっているからである。(Churchland [1995]; 信原 [2000] et al.)

フィードバック型モデルによって長期記憶も説明することができる。一例を挙げると、フィードバック型モデルの一つである Jordan ネットワークは回帰的回路の途中に自己回帰型の文脈ユニット層を持っている (市川 et al. [1994] pp. 183f.). 文脈ユニット層は時間調整をするユニット層である。文脈ユニット層で時間調整をすることができれば、時間的に離れている情報を再び隠れ層に入力し、それに応じた出力を得ることができる。

古典計算主義とコネクショニズムは対立している。前節で確認したように、エピソード記憶は構文論的構造をもっていない。それゆえ、エピソード記憶が部分的に変容することはない。エピソード記憶が変容するのならば、エピソード記憶は全体として変容する。エピソード記憶が不変的であるということは、エピソード記憶が全体として変容しないということである。エピソード記憶が全体として変容しないということ、コネクショニストモデルから導くことはできない。なぜならば、あるエピソード記憶を示す結合荷重の配列は新しい情報の入力の影響を受けて変化することがありうるからである。確かに、結合荷重の配列が変化したからといって、それに応じて実現されるエピソード記憶が必ずしも変容するわけではない。しかし、エピソード記憶の不変性は保証できない。したがって、コネクショニストモデルにおいて、エピソード記憶が全体として変容する可能性は残されている¹¹。

コネクショニストモデルと長期記憶との関係は以上のとおりである。古典計算主義的モデルとコネクショニストモデルはエピソード記憶の不変性をめぐって対立している。古典計算主義的モデルはエピソード記憶の不変性を導くのに対し、コネクショニストモデルからエピソード記憶の不変性を導くことができない。

4.3 認知心理学における長期記憶の可変性

コネクショニズムは長期記憶の可変性を支持している。4.3では認知心理学において長期記憶の可変性を扱っている研究を取りあげる。長期記憶の可変性を扱う研究は既存の心理学の批判を含んでいる。既存の心理学を批判するなかで、長期記憶は変化するという、いわば長期記憶にたいする態度の変更が起きている。本節ではまず Bartlett、ついで Neisser、最後に Loftus の研究を見てみたい。

4.3.1 F. C. Bartlett の記憶研究

Bartlett は伝統的な記憶研究を二つの側面から批判する。一つは方法論的な批判であり、もう一つは伝統的な記憶理論の前提に対する批判である。

第一に Bartlett は Ebbinghaus らの実験方法を記憶研究にふさわしくないと考える。無意味綴りを用いた Ebbinghaus の実験は記憶を他の心的機能から区別して

11 むしろコネクショニズムにおいて、不変的な長期記憶を扱うことの方が難しい。コネクショニストモデルでは、長期記憶同士が相互に干渉してしまい、全てが混沌となっていくという「カタストロフィック干渉」という現象が知られている。

純粹に取り出し、観察することを目的としている。Neisser がのちに主張するのと同様、Bartlett は極度に条件的統制を加える実験方法は記憶の実際のあり方を歪めてしまうと考える (Cf. Neisser [1982])。それゆえ Bartlett は、人間が実際に生活している日常的な場面にそくして記憶を探求しなければならない、と主張する (Bartlett [1932] 14-5 頁)。よって Bartlett の記憶研究はわれわれが日常的に接しているような図形や物語を実験材料に選ぶ。以上が Bartlett の伝統的な記憶研究に対する方法論的批判とそのオルタナティブである。

第二に Bartlett は記憶の動的な側面を強調し、伝統的な記憶理論が記憶を静的なものとして扱っていることを批判する。静的な記憶観¹²によると、過去の印象の痕跡は個別的にかつ永続的に貯蔵されていて、貯蔵されている印象が想起によってそのまま再生される、と考えられる。しかし、Bartlett は記憶を動的なものとする (Bartlett [1932] 227-45 頁)。つまり、過去の印象は相互に関連し、記憶は主観によって能動的に再構成されて「生きて発展しつつ、毎日の行動様式を決定するのに役立つ」(Bartlett [1932] 245 頁) と Bartlett は考える。

Bartlett の研究は日常的な実験材料を使用するという方法を採用し、記憶の動的な性格を結論する。具体的に、Bartlett は「幽霊の戦い」という物語を用いて、記憶の可変性と主観的条件が記憶に及ぼす作用を研究している。被験者は物語を記憶し、そのあとで時間を空けて何回か物語を再生する。その結果、物語の細部は時間が経つにつれて省略、合理化、加工・創作、時間的順序の変更、そういったさまざまな変容を受けていた。そして物語の変容が再生されたときの被験者の情緒的態度によって左右されることも Bartlett は示している (Bartlett [1932] 149-53 頁 et al.)。

Bartlett は記憶の可変性をスキーマ (schema) という概念で説明する。スキーマは記憶の能動的な体制化を示す概念である。ある心的状態に新しい情報が付け加わるとき、その情報はスキーマにしたがって整理される。もしもスキーマと矛盾するような情報が新しく付け加わったときには、その情報はスキーマにしたがって修正される (Bartlett [1932] 229-44 頁)。このようにして Bartlett はスキーマの働きによって記憶の可変性を説明する¹³。

12 Bartlett は Munk [1890] を静的記憶観の例にあげている。

13 スキーマは記憶の可変性を説明する概念である。しかし、同時に記憶の不変性も視野に入れることができる概念である。Bartlett は「幽霊の戦い」の再生を分析している箇所、物語の再生において「いったん話ができあがれば、その一般的な形式あるいは輪郭が驚くほど持続する」

4. 3. 2 U. Neisser の記憶研究

行動主義的心理学が発展するなか、日常心理学に着目したのが Neisser である。Neisser は行動主義的心理学が無視してきた Bartlett の研究 (Bartlett [1932]) を重要視し、日常心理学の先駆的研究と位置づけている (Neisser [1982])。Neisser の研究は Bartlett の研究の流れを汲んでいる¹⁴。記憶の可変性と日常心理学の結びつきを Neisser の研究を概観することで示したい。

行動主義的心理学において、記憶研究は実証的科学として探求されてきた。実証

(Bartlett [1932] 110 頁)と述べている。物語の一般的な形式が持続するのは、スキーマが安定性をもっているからである。

Bartlett の考えに沿って、スキーマの安定性を敷衍してみたい。スキーマの安定性は記憶の可変性と相補的である。スキーマがある一定の安定性をもっていることで、記憶の可変性もスキーマによって説明することができる。安定したスキーマを基準にすれば、記憶の変容を理解することができるからである。一般的に、変化は相対的なものである。記憶が変容するとき、記憶はスキーマに相対的に変容する。スキーマに矛盾しないように記憶が変容されたとき、その記憶はスキーマが安定している限り安定性を得ることができる。

しかしながら、長期記憶の不変性が Bartlett のいうスキーマで十分に説明できるとはいえない。たとえば、van der Kolk が主張している不変的な記憶はスキーマの影響を受けない記憶である。van der Kolk によると、トラウマ記憶はスキーマの影響を受けず、長期間にわたって保存されている記憶である (van der Kolk [1995])。したがって、Bartlett のいうスキーマで van der Kolk のいうトラウマ記憶を扱うことはできない。Bartlett の考え方にしたがると、長期記憶の安定性はスキーマによってもたらされる。もともとの記憶がスキーマにしたがって変容され、そのあとで安定的な長期記憶が可能となる。つまり、長期記憶の安定性は長期記憶の可変性を基礎にしている。しかし、van der Kolk のいう長期記憶の「安定性」は長期記憶の可変性のうえに成り立つ安定性ではない。van der Kolk のいう長期記憶の「安定性」は Bartlett のいうスキーマによって説明される長期記憶の安定性とは異なったタイプの安定性である。van der Kolk は長期間にわたってそのまま保存されている記憶を考えている。こうした長期記憶は安定的であるというよりもむしろ「不変的」である。Bartlett の枠組みでこうした長期記憶の不変性を十分に説明できているとはいえない。せいぜい、長期記憶の可変性のうえに成り立つ長期記憶の安定性を説明することができるだけである。

14 しかし、Bartlett の研究が Loftus や Neisser の研究によって乗り越えられたとはいえない。なぜならば、Bartlett の研究は Loftus や Neisser の研究よりも広い射程をもっているからである。Loftus や Neisser の研究において、長期記憶の不変性は過度に軽視されている。Bartlett も長期記憶の可変性を主張していて、そのあとの Loftus や Neisser の研究に影響を与えた。しかし Bartlett は同時に長期記憶の不変性も視野に入れている。それゆえ、Bartlett の研究は Loftus や Neisser の研究よりも広い射程をもっているといえる。

的科学としてデータを採取するために、主に研究は実験室のなかで行われる。そうした研究は人為的な理想的状態に被験者を置いてデータを採取する。被験者を理想的状態に置くことで、条件の操作は容易になる。余分な条件を取り除き、純粋な記憶を取り出すことができると考えられる。しかし Neisser は純粋な記憶、つまり思考や意志や情動といったものから切り離された記憶を取り出すことができるという考えを否定する。純粋な記憶を思考や意志や情動から切り離して捉えるという方針では現実的な記憶を捉えることができない、と Neisser は考える。それゆえ、Neisser は日常的場面こそが記憶を研究すべき場所である主張する。(Neisser [1982] 3-23 頁)

記憶を日常的場面にそくして研究するという方針をもとに、Neisser は裁判における証言を材料としてエピソード記憶と意味記憶の関係を探っている。結論として Neisser が提示するのは長期記憶の可変性、また、エピソード記憶と意味記憶の混合可能性である¹⁵。

Neisser が事例研究でとりあげたのは、ウォーターゲート事件の裁判である。元大統領補佐官が述べた大統領との会話は驚くほど精密なものであった。しかし、細部において実際に録音されていた会話と異なっていた。Neisser はこの事態をエピソード記憶の変容、あるいはエピソード記憶と意味記憶の混合であると分析する。大統領補佐官は記憶を反復することによって記憶の細部を変容させたが、しかしそれを自分が実際に体験したエピソードであると考えていた。こうしたタイプの記憶は反復 (repetition) を代表 (represent) しているため、エピソード記憶というよりレピソード記憶 (repisodic memory) と呼ぶのにふさわしい、と Neisser は述べている。(Neisser [1982] 165-94 頁)

以上で示されたように、Neisser は方法的に日常心理学をとることにより、長期記憶の可変性を結論している。

4.3.3 E. F. Loftus の記憶研究

Neisser が示した長期記憶の可変性をより先鋭化させたのが Loftus である。Loftus によると、長期記憶は実際に体験された出来事の記憶に外部の情報が付け加わることで再構成される (Loftus [1997] et al.)。Loftus はさまざまな実験によって、長期記憶が

15 エピソード記憶と意味記憶の関係は興味深い話題ではあるが、本論で詳しく論ずることはできない。

再構成されることを示している。

Loftus の行った実験のなかでも、自動車の衝突に関する目撃証言の実験 (Loftus & Palmer [1974]) はよく知られている。まず被験者は自動車事故の映画を見て、そのあとで自動車事故についての質問を受ける。このとき、「自動車がぶつかった (hit) とき、どのくらいの速度で走っていたか」と質問するか、それとも「自動車が激突した (smash) とき、どのくらいの速度で走っていたか」と質問するかによって被験者の回答に偏りが見られた。「激突した」という言葉で質問されたとき、被験者はより大きい速度を回答する傾向が示された。Loftus はこの実験結果を二種類の情報の混合であると分析している。再現された記憶は、もともとの事故を見ている際に得られた情報と、そのあとで外部からもたらされた情報との混合物である (Loftus & Loftus [1976])。

長期記憶を二種類の情報（実際に体験したことに関する情報とそのあとに付け加わる外的情報）の混合と捉えることは、以後 Loftus の採る基本的な立場である。すると、Loftus の研究の目的は二種類の情報がどのように関係しているかを探ることとなる。とりわけ、長期記憶に変容をもたらす外部からの情報に焦点が当てられている。長期記憶を変容させる外部からの情報として Loftus は、言語的情報 (Loftus & Palmer [1974]; Loftus [1979])、イメージ (Thomas & Loftus [2002])、カウンセラーによる暗示 (Loftus & Ketcham [1994]; Loftus [1997]) などを考えている。

記憶を変容させる要素としてのカウンセラーによる暗示に注目することで、Loftus は「偽りの記憶」を指摘する。「偽りの記憶」とは長期記憶の多大な変容、あるいは長期記憶の創作を指している (Loftus & Ketcham [1994]; Loftus [1997])。たとえば、実際は起こっていない幼児期の虐待の記憶がカウンセラーによって創り出され、その記憶をもとに父親が加害者として訴えられるという事件を、Loftus は「偽りの記憶」の例に挙げている (Loftus & Ketcham [1994] et al.)。「偽りの記憶」はもはや二種類の情報（実際に体験したことに関する情報とそのあとに付け加わる外的情報）の混合とはいえない。実際に体験した出来事に関する情報がそのあとに付け加わった外的情報によって駆逐されてしまうからである。

以上のように、Loftus は長期記憶の可変性を主張する。その主張は次第により強い主張に推移する。「偽りの記憶」は長期記憶の全面的な改訂である。すると、Loftus は長期記憶の可変性を主張している、と考えることはもはや正確ではない。むしろ、Loftus は長期記憶の不変不可能性を主張している、と考えるほうがより正確である。

4.4 認知心理学における長期記憶のまとめ

長期記憶，とりわけエピソード記憶の取り扱いをめぐって認知心理学における記憶観の差異を見て取ることができる。エピソード記憶は不変的であるか，それとも可変的であるか，という点でその差異は顕在化する。

Ebbinghaus の伝統に属している心理学者はエピソード記憶の不変性を主張する。また，AI 研究における古典計算主義は記憶の永続性を前提とし，エピソード記憶の不変性を結論する。

それに対して Bartlett, Neisser, Loftus などはエピソード記憶の可変性を主張する。いずれも，長期記憶の内容に着目し，長期記憶の可変性を導いている。また，AI 研究におけるコネクショニズムはエピソード記憶の可変性を導く。

5 フッサールにおける内容的想起

5.1 Husserl の記述にみられる長期記憶の不変性

Husserl の記述は長期記憶の不変性を示しているように見える。そうした記述は初期時間論から後期時間論にかけて，いたるところでみいだすことができる。その部分を Husserl の初期，中期，後期テキストから引用したい。

初期の『内的時間意識の現象学』において，Husserl は

再生産的な想起の場合，現前化の連続体のなかで時間的对象が再び完全に形成され，われわれはそれを擬似的に再び知覚する。(Husserl [1966] Hua. Bd. 10, 51 頁)

と述べている。また，中期の『ベルナウ草稿』において

私が a について再想起する (= $E1(a)$)。つまり，わたしはいまある体験をしている。その体験において a は新しい仕方で意識されている。「再想起された」あるいは以前の過去という性格において a は意識されている。(Husserl [2001] Hua. Bd. 33, S. 361.)

と述べられている。加えて，後期の「C 草稿」の一部に

流れ去ったものは自我を触発することができる。自我は触発にしたがって、流れ去ったものへと再び立ち戻ることができる。自我は流れ去ったものを「いわば」再び眼前にすることができる。すなわち、流れ去った原現前をある様態で「繰り返す」ことができる。この様態とはまさに再-準現前化である。(Husserl [2002] Hua. Bd. 34, S. 169.)

という記述が見られる。以上のテキストはすべて長期記憶の不変性を表しているようにみえる。再想起が以前の知覚をそのまま再現することならば、以前の知覚はどこかにそのまま保存されていなければならない。もちろん、すべての知覚がどこかにそのまま保存されているとまではいえない。しかし再想起される知覚は長期記憶として不変的に保存されている。このようにして Husserl は長期記憶を不変的なものと考えているようにみえる。

しかし以上のテキストから、ほんとうに Husserl は長期記憶の不変性を主張しているといえるだろうか。つまり、Husserl は長期記憶の可変性を視野に入れていないといえるだろうか。そのように即断することはできないように思われる。Husserl の時間論は時間構成といういわば「形式」に関する分析に焦点がおかれているため、あたかも長期記憶の「内容」の可変性を視野に入れていないように見えるのではないだろうか。Husserl は上記のテキストのなかで、長期記憶の内容に関しては必ずしも明確なことを述べていない。したがって、Husserl の想起論が長期記憶の不変性を主張していると考えすることは早計である。しかし、もし Husserl が長期記憶の内容について何も述べていないのならば、Husserl の想起論から長期記憶の不変性が導かれると考えられてしまう可能性はある。

5.2 Husserl の記述にみられる長期記憶の可変性

いっけん、Husserl は長期記憶の不変性を主張しているようにみえる。それを示すテキストは Husserl の著作、草稿のなかのいたるところに見出すことができる。しかし、Husserl の草稿には長期記憶の内容の変化を示しているテキストが含まれている。この節では Husserl が長期記憶の可変性を視野に入れていることを示したい。もっとも、以下の論述はまだ試論の域を出ていない。

長期記憶の可変性が示されるとき、長期記憶は知覚と記憶の相互作用、または、他者の記憶と「私」の記憶の相互作用として捉えられる。ただし、長期記憶の可変性を示

すテキストは Husserl の著作、草稿のなかにそれほど多く含まれていない。以下の引用は 1914-5 年に書かれた相互主観性にかんする草稿の一部である。

私が過ぎ去ったものについて想起しているが、しかし今に至るまでの想起の進行が矛盾を携えている、ということがありうる。つまり、記憶のある 1 つの部分が知覚においてそのきっかけ [= 根拠] を持っており、それゆえに記憶のほかの部分と矛盾するということがありうる。そうしたとき、私はこの〔矛盾した〕記憶を捨てなければならない。「それはそのようなものではなかったのだ」という形でこの記憶を捨てなければならない。(Husserl [1973] Hua. Bd. 13, S. 60.)

ここで Husserl は知覚と矛盾する記憶に言及している。たとえば、私は昨日トンカツを食べたという記憶をもっているとする。しかし翌朝、家のゴミ箱に衣のカスがついた串を発見した。普通、トンカツは串に刺さっていない。私の記憶に残っているトンカツも串に刺さっていなかった。私のほかにこんなところに串を捨てる人はいない。そこで、私はトンカツを食べたという記憶が誤っていると判断する。発見された串が実は幻覚であるとか、夜中にこっそり誰かが串を置いていったと判断することは不合理である。記憶が誤っている可能性を考えるほうが合理的である。このとき「私が昨日食べたのはトンカツであった」という記憶が「私が昨日食べたのは串カツであった」という記憶に改変される。

長期記憶が訂正されるとすれば、長期記憶は可変的である。長期記憶が訂正される場合、知覚された対象が変化し、変化した対象が想起される。変化している想起された対象が知覚と不整合であるとき、その対象は知覚にしたがって訂正を受ける。もっとも、想起された対象と知覚が不整合であるとき、知覚が訂正されることもありうる。しかし、知覚の訂正は長期記憶の可変性の反証とはならない。なぜなら、記憶と知覚が不整合であるとき、常に知覚が訂正されるとは限らないからである。

以上のように Husserl のテキストには長期記憶の可変性を示唆しているとも考えることができる。この場合の長期記憶の可変性は長期記憶と知覚の整合性、広い意味での知識の整合性がポイントになっている。これは Bartlett が主張した長期記憶の可変性と同一である。すでに述べたように Bartlett は、スキーマにしたがって長期記憶が変容することを主張している。スキーマにしたがって長期記憶が変容するとき、記憶の内容とスキーマとの整合性がポイントとなっている。それゆえ、Husserl の枠組みで Bartlett

が主張するタイプの記憶の可変性を説明することは十分に可能である。

それでは、たとえば Loftus が主張しているタイプの長期記憶の可変性を Husserl はどのように説明しうるだろうか。Loftus が主張しているタイプの長期記憶の可変性とは、もともとの記憶に外部からの情報が付け加わることによって記憶の内容が変化するタイプの可変性である。ここでも相互主観性にかんする草稿（1910-1）から一部分を引用したい。

過ぎ去ってしまったものの繰り返しは本当に過ぎ去ってしまったものと同一なのであろうか？〔……〕再想起は絶対に疑い得ないものとして妥当しているのであろうか？誰もがそれは違うと断言するだろう。想起は思い違いをするものであり、それは経験的な想起でも、現象学的な想起でも変わらない。それどころか、現象学的な再想起の誤りを経験的な再想起の誤りに照らして指し示すことすらできる。なぜならば、われわれはある仕方では経験的な想起においても反省をすることができるからであり、いわば経験的な想起において現象学的な想起を作り出すことができるからである。（Husserl [1973] Hua. Bd. 13, S. 163.）

ここでいわれている経験的な想起 [= 経験的な記憶] とは「2004年3月14日」とか「去年の春」といった客観的ないし相互主観的な時間的位置を伴っている想起 [= 記憶] である。経験的な想起をカッコに入れることによって、現象学的な想起を対象化することができる。Husserl は考える。現象学的な想起とはかつて知覚された「私」に固有の体験を意識することである。「私」に固有の記憶は他者によって外部からもたらされる情報を必要としない。それゆえ、経験的な想起をカッコに入れることは、他者によって外部からもたらされる情報をカッコに入れることでもある。ところで、他者によって外部からもたらされる情報は他者の記憶によってもたらされる情報である。それゆえ、経験的な想起をカッコに入れることは他者の記憶をカッコに入れることでもある。言いかえると、経験的な想起 [= 記憶] は他者の記憶を含んでいる。同時に「私」の記憶も経験的な想起に含まれており、他者の記憶と連関している。つまり、経験的な想起 [= 記憶] は「私」の記憶と他者の記憶の相互作用を経ている記憶であるともいえる。

上記の引用によると、Husserl は Loftus が主張しているような外部からの情報による長期記憶の可変性を視野に入れている。たとえば、「タヌキそばを食べた」という

記憶が「テン普拉そばを食べた」という記憶に変わる可能性がある。こういった長期記憶の変化は外部からの情報によるものである。つまり、経験的想起は現象学的想起に影響を及ぼす可能性がある。経験的想起は現象学的想起の誤りを指摘することができる。さらに、経験的想起は新しい現象学的想起を作り出すことができる。すなわち、経験的想起は Loftus が主張する「偽りの記憶」を作り出すことも可能である。Husserl は外部からもたらされる情報によって、つまり他者の記憶によって「私」の長期記憶が変化する場合もあると主張している。

本節では長期記憶の可変性を Husserl のテキストを参考にしながら論じた。結果として、第一に、長期記憶は後続の知覚によって変化しうる。第二に、長期記憶は他者の記憶によって変化しうる。この場合の再想起は、かつて知覚された対象がそのまま準現前化される、という再想起と異なっている。かつて知覚された対象の内容が変化しているからである。長期記憶の可変性を視野に入れた場合、再想起は知覚と記憶の相互作用、または、他者の記憶と「私」の記憶の相互作用として捉えられている。

5 結び

Husserl の想起論は形式に焦点が当てられていて、内容に関する考察に乏しい。すると、Husserl の想起論は長期記憶の不変性を支持しているかのようにみえる。しかし、それはあくまでも Husserl の時間論が形式的側面に焦点を当てていたからである。Husserl の考察には長期記憶の可変性を示すと考えられる箇所も見出すことができる。その点を最後に、Husserl による長期記憶の可変性として示した。しかし、その考察はまだ十分とはいえず、試論の域を出ない。よって、Husserl の長期記憶の可変性をより十分に説明することが今後の課題である。

参考文献

- Atkinson, R. C. & Shiffrin, R. M. [1968] “Human Memory: A Proposed System and Its Control Processes”. Spence, K. W. & Spence, J. T. ed., *The Psychology of Learning and Motivation*. Vol. 2, New York: Academic Press, pp. 89–195.
- Bahrnick, H. P. [1984a] “Memory for People”. Harris, J. E. & Morris, P. E. ed., *Everyday Memory, Actions and Absent-Mindedness*. London: Academic Press, pp. 19–34.
- Bahrnick, H. P. [1984b] “Semantic Memory Content in Permastore: Fifty Years of Memory for Spanish Learned in School”. *Journal of Experimental Psychology: General*. 113, pp. 1–29.
- Bahrnick, H. P. et al. [1975] “Fifty Years of Memories for Names and Faces: A Cross-Sectional Approach”. *Journal of Experimental Psychology: General*. 104, pp. 57–75.
- Bartlett, F. C. [1932] *Remembering: A Study in Experimental and Social Psychology*. London: the Syndics of the Cambridge University Press.
- Churchland [1995] *The Engine of Reason, the Seat of the Soul: A Philosophical Journey into the Brain*. Cambridge; MA: The MIT Press. (信原幸弘 ; 宮島昭二訳 [1997] 『認知哲学——脳科学から心の哲学へ——』産業図書.)
- Collins, A. M. & Quillian, M. R. [1969] “Retrieval Time from Semantic Memory”. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*. 8, pp. 240–7.
- Craik, F. I. M. & Lockhart, R. S. [1972] “Levels of Processing: A Framework for Memory Research”. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*. 11, pp. 671–84.
- Ebbinghaus, H. [1885] *Über das Gedächtnis*. Leipzig: Duncker and Humboldt. (宇津木保訳 [1978] 『記憶について』誠心書房.)
- Husserl, E. [1939] *Erfahrung und Urteil*. Landgrebe, L. ed., Prag: Academia. (長谷川宏訳 [1975] 『経験と判断』河出書房新社.)
- Husserl, E. [1966] *Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewußtseins (1893–1917)*. Boehm, R.

ed., *Husserliana*, Bd. X, Den Haag: Martinus Nijhoff. (立松弘孝訳 [1967]『内的時間意識の現象学』みすず書房.)

Husserl, E. [1973] *Zur Phänomenologie der Intersubjektivität*. Texte aus dem Nachlaß, 1: 1905–1920, Kern, I. ed., *Husserliana*. Bd. XIII, Den Haag: Martinus Nijhoff.

Husserl, E. [1980] *Phantasie, Bildbewußtsein, Erinnerung: Zur Phänomenologie der anschaulichen Vergegenwärtigungen*. Texte aus Nachlaß (1898–1925), Marbach, E. ed., *Husserliana*, Bd. XXIII, Den Haag: Martinus Nijhoff.

Husserl, E. [2001] *Die Bernauer Manuskripte über das Zeitbewußtsein (1917/18)*. Bernet, R. & Lohmar, D. ed., *Husserliana*, Bd. XXXIII, Dordrecht; Boston; London: Kluwer Academic Publishers.

Husserl, E. [2002] *Zur phänomenologischen Reduction*. Texte aus dem Nachlaß (1926–1935), Luft, S. ed., *Husserliana*, Bd. XXXIV, Dordrecht; Boston; London: Kluwer Academic Publishers.

市川伸一 et al. [1994] 『記憶と学習』岩波講座認知科学, 5, 岩波書店.

Loftus, E. F. [1979] *Eyewitness Testimony*. Cambridge: Harvard University Press. (西村武彦訳 [1987] 『目撃者の証言』誠心書房.)

Loftus, E. F. [1997] “Creating False Memories”. *Scientific American*. 277, 3, pp. 70–5.

Loftus, E. F. & Ketcham, K. [1994] *The Myth of Repressed Memory*. New York: St. Martin's Press, 1994. (仲真紀子訳 [2000] 『抑圧された記憶の神話——偽りの性的虐待の記憶をめぐって』誠信書房.)

Loftus, G. F. & Loftus, E. F. [1976] *Human Memory*. Hillsdale; NJ: Lawrence Erlbaum Associates. (大村彰道訳 [1980] 『人間の記憶』東京大学出版会.)

Loftus, E. F. & Palmer, J. [1974] “Reconstruction of Automobile Destruction: An Example of the Interaction between Language and Memory”. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*. 13, pp. 585–9.

Munk, H. [1890] *Über die Functionen der Grosshirnrinde: Gesammelte Mittheilungen mit Anmerkungen*. Berlin: Hirschwald.

Neisser, U. ed. [1982] *Memory Observed: Remembering in Natural Context*. San Francisco;

- Oxford: W. H. Freeman and Company. (富田達彦訳 [1988-9] 『観察された記憶——自然文脈での想起』上, 下, 誠信書房.)
- 信原幸弘 [2000] 『考える脳・考えない脳——心と知識の哲学』講談社現代新書.
- Penfield, W. & Perot, P. [1963] “The Brain’s Record of Auditory and Visual Experience”. *Brain*. 86, pp. 595-696.
- Penfield, W. & Roberts, L. [1959] *Speech and Brain Mechanisms*. Princeton: Princeton University Press.
- Roy et al. [1999] “Beyond the Gap: An Introduction to Naturalizing Phenomenology”. Petitot, J. et al. ed., *Naturalizing Phenomenology*. Stanford; CA: Stanford University Press, pp. 1-80.
- Rumelhart, D. E. et al. ed. [1986] *Parallel distributed processing: Explorations in the microstructure of cognition*. Vol. 1, 2, Cambridge; MA: The MIT Press. (甘利俊一監訳 [1989] 『PDP モデル—認知科学とニューロン回路網の探索』産業図書.)
- Schank, R. C. & Abelson, R. P. [1977] *Scripts, Plans, Goals and Understanding: An Inquiry into Human Knowledge Structures*. New York: Lawrence Erlbaum Associates.
- Squire, L. R. [1987] *Memory and Brain*. New York: Oxford University Press. (河内十郎訳 [1989] 『記憶と脳——心理学と神経科学の統合——』医学書院.
- 高野陽太郎 ed. [1995] 『記憶』認知心理学, 2, 東京大学出版会.
- Thomas & Loftus, E. F. [2002] “Creating Bizarre False Memories through Imagination”. *Memory & Cognition*. 30, 3, pp. 423-31.
- 都築誉史 et al. [2002] 「高次認知過程に関するコネクショニストモデルの動向」『心理学研究』72, 6, pp. 541-55.
- Tulving, E. [1972] “Episodic and Semantic Memory”. Tulving, E. & Donaldson, W. ed., *Organization of Memory*. New York: Academic Press, pp. 381-403.
- Tulving, E. [1983] *Elements of Episodic Memory*. Oxford: Oxford University Press. (大田信夫訳 [1985] 『タルヴィングの記憶理論』教育出版.)
- Van der Kolk, B. A. & Van der Hart, O. [1995] “The Intrusive Past: The Flexibility of Memory and the Engraving of Trauma”. Caruth, C. ed., *Trauma: Explorations in Memory*. Baltimore: The Johns Hopkins University Press. (下

河辺美知子監訳 [2000] 『トラウマへの探求——証言の不可能性と可能性』(作品社.)

Van Gelder, T. [1999] “Wooden Iron? Husserlian Phenomenology Meets Cognitive Science”. Petitot, J. et al. ed., *Naturalizing Phenomenology*. Stanford; CA: Stanford University Press, pp. 245–64.

Varela, F. J. [1996] “Neurophenomenology: A Methodological Remedy to the Hard Problem”. *Journal of Consciousness of Studies*. 3, No. 4, pp. 330–350.

Varela, F. J. [1999] “The Specious Present: A Neurophenomenology of Time Consciousness”. Petitot, J. et al. ed., *Naturalizing Phenomenology*. Stanford; CA: Stanford University Press, pp. 266–314.

